

10年ぶりのパナマ

激しい変貌と未来への期待



ほぼ10年ぶり訪問のパナマは、懐かしい“スコールの歓迎”から幕を開けました。昨年11月中旬。雨季。車で空港から市内に向かう途中、突然に激しい雨がフロントガラスをたたきつけてきました。10メートル先もよく見えない。ライトをつけ徐行運転。それでも市内のホテルに着くころには雨はすっかり上がっていました。ところが、空港の後方を見ると空は真っ黒。あちらは今、土砂降りの模様。雨雲の流れに沿ってスコールが移動しているのです。



パナマ運河(ミラフローレス水門)

迎えてくれたパナマの友人Mさんはいみじくも言いました。

「ホラ、日本で諺があるでしょう?たしか『雨降って地固まる』って。“日本通”のMさん、なかなかしゃれた言葉をかけてくれます。

それにしても——なんとパナマシティの変貌の激しさ!20年前、私が特派員として駐在していたころは、高層ビルといえば数えるくらいだった市内に、ニョキニョキと、まるでマイアミかニューヨークを思わせるようなビルが建っています。オフィスというよりも、大部分が20階、30階建でのマンション。それに工事の進行形を象徴するクレーンが、目の届く範囲だけでも30本以上、空に向かってそびえていました。

草原と荒地に囲まれていた開設当時のパナマ日本人学校(校歌の作詞:筆者)も、今は高層マンションに囲まれ、はるか上のほうから覗き見されているような感じです。

街は車の洪水。電車、地下鉄がないことにもよりますが、都内よりひどい。なぜこんなに変わったのか?「外国からの投資ですよ。アメリカ、ベネズエラ、コロンビア、そしてアラブまたユダヤ人からもネ。日本はあまり目立たないなあ」とMさん。チェックインしたホテルもやっと予約できたもので「今は、いつ、どこのホテルも満杯です」とのことだった。

1989年、アメリカ軍の侵攻とノリエガ将軍の逮捕。1999年末、アメリカからパナマ運河と同運河地帯の返還。政治の民主化。さらに10年計画でのパナマ運河の拡張工事も始まって、パナマは今、新しい建設の時代に入っていました。

降り立った空港名も「トリホス(元将軍)国際空港」からそれ以前の名前「トクメーン国際空港」へと戻り、軍の影響下にあったものはほとんど消えつつあるようです。アメリカの統治下にあった、緑豊かな運河地帯(沖縄県ほどの広さ)も、パナマ政府の管理の下で今、開発が進んでいます。

一方、物質面の発展の陰では、精神面の荒廃が生じてくるのも歴史の教訓です。こうした状況下、仏教団体であるパナマSGI(創価学会インタナショナル)が、社会、特に教育界から高い評価と期待を寄せられていました。

そうそう、もう一つ大事なこと——前号で述べたスペイン語落語、まずはこのパナマで初演(「天狗裁き」)してきましたよ。



雨季のセロ・アンコンから望むパナマシティ

